

# 記者の目

いま、ヒロシマ、ナガサキを讀むとして居る。いろいろな書物がある。中でも戦後首相の原爆参列で燃えた「ヒロシマ」の書、夏川静江が取材して書いた。不沈沈黙、歐州移動支援と判断的な発言を重ねてきた前首相の地獄で「私」も平和主義者、夕方派といわれるのは平和を現実的な方法で守っているから



池田 知隆 (社会部)

## 被爆者の神経を逆なでに

本への原爆投下と同情でもうさない。せんぶ——原水禁広島会、で今週、新設された百の分の科会「非核社会と文化」で、六日、ヒロシマの中曽根首相「過ちは繰返しませぬか」と列んだ原爆参列前へ、一非核三原則堅持を誓ったあと、原爆資料展「原爆犠牲者ホム」を訪れたのだが、その発言に驚いた。老人ホムでは「病氣は分から、気持ちと根性さえしかりしてれば病氣は体に入ってきた」と「日本人は三年も、この島で、他の異民族がおり、大和民族が手を取り合って生きてきた」と原爆後遺症で苦しむ原爆遺児を在日韓国人被爆者の神経を逆なでした。

## ヒロシマ・ナガサキ

「被爆者代表からの要請を聞く会」では、首相は要請は持ち帰って検討すると、具体的に返答せず、その代わりに「夕方派」は述べられている、平和を現実的方法で求めるにいられたと語った。首相のヒロシマ訪問は、ヒロシマをいつか「力」の論理に引き込み、つまずくところ、「核アレルギー」解消の石のの一本に見えさせる。平和記念式典会場で、中曽根首相のあいさつの際、原水禁世界大会の海外代表たちが壇上に背を向け抗議する一幕もあった。

「東海アジアの人たはヒロシマを体験もせず、理解して」

だ」と繰り返した。原爆のような悲惨な体験を経験するに軍備を増強していかなくてもいい。「ヒロシマ・ナガサキの心」は核軍縮とかが、軍拡の論理にも吸収されかねない。これまでの軍拡と運動を再検証し、一人々の暮らしのレベルから新たな「非核」の道を探らねばならぬ」と切実に感じた。

## 第三世界、原発も含め

えに苦しむ第三世界の国々、原発の稼働物の海洋投棄……日本の平和運動の原動力は、ヒロシマ、ナガサキにある。あのすがすがしいが、被爆体験をも

とに核の恐怖を訴えるだけで、他の人と連帯している世界に通用しない。私たちの「平和」に対する意識の教育は、つまり他人とされた教師に戦争を知らない世代が増えている中、全国の大学に先かけて、平和と教育講座「非」を設けた神戸大学教育手続部。講座設立趣意の一人、和田進助教授は約半年間の調査を通してこんな感想を抱きかたいた。いや、戦争の話をすればするほど、戦争とは人間としてなっていくべきである。とあてたのだが、「いまの生

## 自衛隊観 変化する

いま、私の手元に広島県の高松市立自衛隊資料がある。今年五月、県高松組がまとめたものだが、「いまの生

## いま「平和」が問われている

# 暮らしの中から非核を



感じだ」と苦言込め、無力感に浸り込まれていく中で、約七五割が自衛隊を否認、日本の核武装については「こんな感覚が学生から返って来た。平和について向って来た持たざるをえぬ状況か本を説くとも思って、戦争にもなるかもしれないが四九者の意見に堪えるので、多分、多分と戻った。広島の高松組を説いて、いよいよ、戦争防止のために核正しひたすか」

## 首相が持ち込む「力」の論理超えて

「両」の教育、研究に送る。友「両」から送られるの事情について報告してもらった。相互理解を深めること、互い理解を深めてもらう。やれるかわかりませんが、南北の市民の交流を深めたい」と切り返している。

## 一人々々の人間地震で

五百夜、広島市内の喫茶店で、タイ・イン「なげ中根が広島で」を開いた原水禁理事、尾木本幹雄・広島修道大教授はいう。「いま学生たちが流転型で生きる、といふんぞ。流れに逆らって少し目をあげてほしい。すると前に抵抗、風圧が加わると、自らがよく見える。生き方もよくなっていく。そして一人々が人間地震をおこし、被爆を広げていこうという平和運動はできないか。そのとき中曽根首相の「力」の論理を超えた「非核」の世界が見えなくなるかもしれない。ヒロシマ、ナガサキを知ることは、世界に大きく目を広げ、足元をみること、生活のあり方を考えよう」とではないだろうか。

切切とされていく子ほど、力へのあこがれは強い。受験体制の中で、生徒の自治活動、主体性を育てる工夫をしたい。生徒に主体性がなければ、平和教育もできません。広島大学附生、田舎克哉君、いまだ南北ネットワーク運動に取り組んでいける。反核運動が盛り上がり集結は出た。私が生

「あ、さ、この本は……」  
自衛隊第一師団の目のまは、  
（表紙）は、自衛隊第一師団の  
（表紙）は、自衛隊第一師団の